蜂　蜜　考（I）
—人々と自然との調和—

A Study of Honey
The Harmony between People and Nature

（1998年３月31日受理）

菅　　淑江　　田中由紀子
Yoshie Suga　　Yukiko Tanaka

Key words：蜂蜜，蜂蜜のルーツ，古代オリエント

緒　　言

蜂蜜は世界のどこの市場にも見られ，多くの人々に利用されている。わが国でも近年は健康食品として蜂蜜やローヤルゼリーあるいはプロポリスが市場を賑わして，それらの愛好者もかなり多いように見受けられる。これらが，人々に愛用され続けてきたのはそれなりの理由があると思える。

筆者等はまず蜂蜜に限りそれの歴史的な情報を集めた。蜜蜂についての昆虫学的な文献や養蜂についての専門書は多く，また蜂蜜についての栄養学的な記述や，西ヨーロッパを中心とした民間伝承（ギリシア神話も含めて）も出版されている。しかし古代オリエントを中心に日本をふくめた東アジアにおける蜂蜜に関する史実は，系統的にはまとまっていない。そこで蜂蜜と人々とのかかわりを中心にして，蜂蜜がなぜ世界中で愛用され，珍重され続けてきたのかを，ルーツを求めながらまとめたのでその一部を報告する。

砂糖の歴史

蜂蜜の持つ役割のなかで，中心になるのは「甘い」ことと「薬効」である。この「甘い」ことを語るとき，砂糖の歴史と社会との係わりを抜きにしては語れない。

（註）

ロイヤルゼリー：別名『王乳』とも呼ばれ，花粉を材料として，若い働き蜂の咽頭腺などから分泌される乳白状物質でタンパク質に富んだ液で，甘い蜂蜜に比べてピリッとして酸味が強く，収れん性のある味と香りがある。幼虫初期の３日間はすべて幼虫に，その後は女王蜂となる幼虫にのみ与えられる。

プロポリス：蜜蜂の巣にある物質で木の芽，つぼみ，花粉などをかみ砕き，ハチ蠟などと一緒に蜂が巣に塗り込めたもので，防水や殺菌作用があると言われている。古くから抗菌作用が知られていて，エジプトのミイラの保存や欧州では化膿止めとして利用されていた。近年になって有効成分はアルテピリンCで約５％含まれていることが解明された。

そこで，北川稔の『砂糖の世界史』を参考にして以下にその歴史を簡単に述べる。

ヨーロッパでの砂糖の普及は紀元前1000年前後とされているが，その起源は，インダス文明圏の熱帯雨林の周辺地域とされ，そこから西南アジアに広まって栽培されたサッカルム・オフィチナーレと，また根栽農耕地帯としての東南アジアから中国に分布したサッカルム・シネンシスがその起源とされている。ヨーロッパ人が最初に砂糖のことを知ったのは，紀元前4世紀のことである。一時ギリシアからインドに至る大帝国を作ったアレキサンドロス大王(B.C356～323)が，東方に遠征し北インドに入ったとき，兵士達が「蜂が作ったのではない甘い蜜」をみつけ大喜びしたという。「インドでは蜂にたよらずに葦（サトウキビ）から蜜をとっている」という報告があったほど，甘いものは蜂蜜という固定観念から抜け切れていなかったのである。このとき以来，ごくわずかな砂糖が隊商によってヨーロッパにもたらされて行った。一方，砂糖はコーランとともにインド，インドネシア，中国，トルコ，北アフリカへ広がって行ったのである。こうして西東に広がったイスラム教徒の支配した地域には，砂糖きびの栽培と精糖の技術がつぎつぎと伝えられた。なかでもキプロス，ロドス，クレタ，マルタ，シチリアなど，現在のトルコからイタリアにかけての地中海東部の島々でその栽培が盛んになった。もともと砂糖と奴隷制度の結びつきは，イスラム教徒が世界の砂糖の生産を握っていた時代から始まり，エジプトでは砂糖きびの栽培が始まってからは，農閑期になるはずの夏にも厳しい農作業が必要となり，農民の年間の生活習慣，農事暦が変わったと言われている。砂糖きびの栽培には適度の雨量と温度が必要な上，その栽培によって土壌の肥料分が消耗して土地が荒れるため，つぎつぎと新鮮な耕地を求めて移動して行かなければならない。ブラジルやカリブ海の島々には，砂糖生産のためにプランテーションと呼ばれる大農園がつくられた。そこでの基本的な食料は輸入に頼らせ，労力を砂糖きびの栽培と加工のみに集中させた。16世紀以来の世界の歴史は，その時々の「世界商品」をどの国が握るか，という競争の歴史として展開してきた。そして世界を動かしてきた「世界商品」の最も初期の例が砂糖であった。16世紀から19世紀にかけて，世界中の実業家や政治家は，砂糖の生産をいかにして握るか，その流通ルートをどのようにして押さえるか，といった問題に知恵を絞ってきた。

17世紀のカリブ海地域では現地の食料を北アメリカから輸入しながらも，人々はひたすら砂糖きびを栽培させられたのである。これらの資本はヨーロッパ諸国で主としてイギリスの資本が注ぎこまれ，白人の労働者よりはるかに安上がりで，大量の労働力を得る方法として，アフリカの人々を連行してきて奴隷として働かせた。そのため，アフリカの社会に大きな爪跡を残した。砂糖きびはイスラム教徒とともに西方への旅を始め，キリスト教徒の手で西半球に広められた。奴隷制度がなくなってもカリブ海地域や南アメリカやハワイで，インド，中国，インドネシア，そして日本からの移民労働者の働きにより栽培され続けて来たのである。それは1799年本格的にビートから砂糖が採れるようになってからも続いた。

このように社会的に大きな問題を引きずりながら，世界の人々にもたらした砂糖は，いまや日常生活になくてはならない大切なものである。蜂蜜は砂糖にくらべいささかの民族的な苦痛を与えたことはあったにせよ，歴史的には平和でしかも自然との調和を保ちつつ現代に至っていると言って

もよいのではないだろうか。

人々と自然の調和の中で綿々と引き続き重宝されてきた蜂蜜は，蜂という「生物」と，花という「植物」が醸し出す自然な「甘さ」が人々を魅するのだと思う。現代の日本では「健康食品」としてのイメージが強く存在するが，歴史上では「甘味料」としての主たる役割の中に，「薬効」面を鮮明にして存在する。

アンケート調査の結果

まず，日本における蜂蜜の使用の現状を推定可能なモデルとして，食物栄養専攻の短期大学生と食物や食品について専門の教育を受けていない看護専門学校生を対象に，蜂蜜についてのアンケート調査を行なった。その結果を以下に示す。

1．日本ではいつ頃から蜂蜜は利用されていたか（%）

	弥　生	飛鳥奈良	平　安	鎌倉室町	江　戸	明　治
短期大学生	10.6	12.6	21.2	19.2	19.7	16.7
看護学生	2.2	19.6	26.1	17.4	26.1	8.7

2．蜂蜜はどこから伝わってきたのか（%）

	日本古来	中国から	東南アジア	欧米諸国	その他
短期大学生	13.4	32.8	32.3	19.4	2.0
看護学生	21.7	45.7	17.4	10.9	4.3

3．蜂蜜は好きですか（%）

	大好き	好　き	普　通	嫌　い	大嫌い
短期大学生	12.4	32.3	43.3	7.5	4.5
看護学生	2.0	24.5	61.2	8.2	4.1

4．日常に用いていますか（%）

	毎日使用	ときどき使用	使用しない
短期大学生	2.0	51.7	46.3
看護学生	2.0	36.0	62.0

5．利用の仕方（%）

	化粧整髪用	薬　用	飲料用	トーストに	料理用	製菓用
短期大学生	13.9	19.9	13.0	20.9	10.9	21.4
看護学生	8.9	17.8	4.4	26.7	17.8	24.4

アンケート調査の結果については，まず「蜂蜜はいつ頃，どこから伝わってきたのか」との答えの結果からは特定の時代を推定することはできない。あまり確実な知識からの答えとは考えられない。使用については，ときどき使用するとの答えがほとんどで，毎日使用するを含めても蜂蜜の利用は約50％である。蜂蜜への関心の薄いことがうかがえ，したがって「どこからきたのか」という設問に対する答えも至極散漫なのも当然であろう。

この結果から，蜂蜜の日常性は低く，歴史的な知識や蜂蜜に関する興味は，生活の中に位置を占めていないのではないかと推定された。

しかし，この50％の中から利用方法，目的を自由記述したものからは興味ある結果が得られた。最もよく利用するのは，トースト，ホットケーキ，ヨーグルトを食べるときで，続いてクッキーやカステイラなどの菓子やケーキを作るときに利用している。甘味料としてと保水性としてのしっとりとしたテクスチュアーを期待してのことであろう。カレーを作るときによく使われているが，これは，甘味を兼ねて微妙な味の複雑さを期待してであろうか。飲み物としてレモネード，生姜湯，レモン酒，かりん酒などに用いているほか，紅茶やコーヒー，ココアを飲むときに入れている。また，口内炎や唇の荒れに薬用として利用している。咳止めとしての利用は，そのまま飲む，卸し大根に混ぜる，大根絞り汁とともにシロップにして飲む等が上げられているが，これらは日本における蜂蜜の民間伝承の例であろう。化粧用としては肌の調整，栄養補給，それに整髪に用いられている。これらは蜂蜜の持つ神秘性を信じているのではなく，最近の科学分析による成分に期待している面が大きい。

冒頭にも述べたが，蜂蜜は甘味料としての利用が主体であるが，粘性と価格との関係から日本では少量の使用にとどまるケースが多いため，蜂蜜としての独立した認識が人々の中に薄いのではないかと考える。

筆者らが訪れたオリエントの国々では，蜂蜜が表面に出ている食品が多い。トルコでは蜂蜜がたっぷりとかかっていることが条件の菓子類が多い。例えば，バクラバ，テル・カダイフ，レバーニヘルバ等である。トルコに限らずイスラム暦を用いている国々では，金曜日のよるとラマダーン明けに，蜂蜜とジャスミンを用いる伝統的な習慣がある。エジプトでも蜂蜜のたっぷりかかったカハクとよばれるカステイラ様のケーキがある。その他イスラムの国々の人たちは蜂蜜の甘さが好きで，日常の必要な食品として市場（スーク）にはたくさん売られている。日本人とは蜂蜜の扱いが違う。

日本に於ける蜂蜜の由来

以上，アンケート調査の結果得た資料から見ると，彼等には日本における蜂蜜利用の歴史につい

バクラバ：パイ皮（ユフカ）を積み重ねた間に，摺りつぶした胡桃やピスタチオを挟んで切りこみをいれて炉で焼き上げた後，蜂蜜をたっぷりしみこませたもの。
テル・カダイフ：針のように細くのばした小麦粉の焼き菓子をバターと蜂蜜でまとめたもの。
レバーニ：スポンジのケーキに蜂蜜をたっぷりしみこませた菓子。
ヘルバ：東トルコの黒海沿岸の町トラブゾンで食べた甘酸っぱいデザート。

てあまり知られていないと考えられる。また世間一般に見られる書物にも蜂蜜についての系統的に詳細な由来が書かれたものは見当たらない。断片的には紹介されてはいるがまとまってはいないので，知識として定着させるには不便である。そこで筆者等は日本の記録に残っている史実を可能な限り集めて，日本に於ける蜂蜜の由来をまとめることにした。

古代の薬物として天平の時代からさまざまなものが用いられていたということは，薬学を修めた者の常識である。そしてそれらの薬は主として唐の国からのものであったと伝えられているし，また鑑真が来日するときに（742）用意した荷物の中には薬物が多く積み込まれたとも伝え聞く。

当時の薬物といえばまず正倉院御物が浮かぶ。奈良の正倉院には聖武天皇の遺愛の宝物が光明皇后によって，天平勝宝８年（756）に奉納され，納められた御物のうちには約60点の薬物がある。それらはすべて当時の唐土からもたらされたものとされ，一部は実際に施療に供出消費されて，その中38品目が現存し，それらの薬物の中に円盤状の臈蜜が大量に残っている。これは真正の蜜蠟である。薬用以外に蠟染めや鋳造用，工芸用として，また，大仏の修理にも用いられたという記録がある[1)]。これだけの蜜蠟が残っているということは，蜂蜜の記録はないが蜂蜜もまた多量にあったと考えられる。事実「天平宝字４年（760）４月28日光明皇后は使いを五大寺に遣わして，寺ごとに種々の薬を二必櫃・蜂蜜を一缶（ほとぎ）を寄進した。皇太后の健康が不調のためである」との記録がある[2)]。

また続日本紀（上）には蜂蜜が日本へ入ってきた経過が書かれている。すなわち，聖武天皇の天平11年12月10日（739）渤海国の使の己珍蒙らが朝廷を拝し，王の手紙と国の産物を献上した。虎，熊，豹などの毛皮や朝鮮にんじん30斤とともに蜂蜜三石を進呈したとある。渤海国は７世紀の末から10世紀の始めにかけて中国の東北地方から東部に栄えた国で，日本には第二代目の芸王の頃から使者を送って修好を結んだ。その後の修好貿易が続き，この時代に蜂蜜が日本に多く献上されたとある[3)]。また同時に蜜蠟も献上されたと考えられるのである。

しかし，日本でも蜂蜜を採ろうとして，７世紀皇極天皇（642～645）の頃（日本書紀巻第二十四皇極天皇２年11月～３年正月）当時人質として日本にいた百済の太子餘豊が蜜蜂の房（巣）４枚を三輪山に放って飼ったが増えなかったとの記録がある。日本へこのときに初めて蜜蜂を飼うことが伝わったとされる。和名では美知波知とされていた[4~①)]。そして現代でも韓国の扶余と日本の奈良県桜井市の三輪山周辺の農家では，まったく同型の養蜂の容器が使用されているとのことである。餘豊が三輪山で養蜂を行おうとしたことが確かな史実であったことを窺い知ることができる[5)]。
また，さらに溯ってもっと以前から蜜蜂はいたのではないかと推測できる記録もある。
すなわち推古天皇35年夏５月（625）「夏五月に，蝿有りて聚集る（あつまる）。その凝り累る（かさなる）こと十丈ばかり。虚（おおぞら）に浮かびてもって信濃坂を越ゆ。鳴く音雷の如し。すなわち東のかた上野国に至りて自ら散りぬ」とある。この文中の蝿の群れは蜜蜂の巣分かれと考えられている[4~②)]。したがって，餘豊が養蜂を試みた以前から日本にも生息していたことになる。そしてこの蜜蜂の種類は，現代でも日本の山間部で木箱や洞のある丸太などを用いて細々と飼われているニホンミツバチであろうとされているのである[6~①)]。少し時代は下がるが，国産の蜂蜜を宮

中に献上していたことについては『延喜式』（927）に「蜜甲斐国一升，相模国一升」とか「摂津の国蜂房七両，伊勢国蜂房一斤十二両」などの記録があり，20ヵ国からの献上で，この国々ではこの時代にすでに採蜜をしていたのは事実らしい。しかし本格的に養蜂技術が盛んになったのは江戸時代だとされる[6~②]。

最近になって，「縄文時代は野性食で甘みのあるものは少なく，現在の砂糖に匹敵するのは蜂蜜ぐらいである。中部地方にはスガレ（ジバチ）の巣を掘り出し食用にする習慣がある」[7]の記事を見出し，日本でも有史以前から蜜蜂は生き続けていたのかもしれないと考えるに至った。

最近，高知県野市町の下の坪遺跡で，奈良時代の建物の柱穴から4人の仙人が想像上の動物や麒麟などに乗った『四仙騎獣』文様の八稜鏡の破片が出土した。この破片は鏡全体の¼強に当たり，半径5.5cmの扇型で，つまみの横に麒麟らしい動物，外側に蜜蜂らしい昆虫が描かれている。日本製らしいと説明されているが，まことに時を得た資料である。ただし8世紀頃には蜜蜂や蜂蜜は上流社会では珍重されてはいたが，庶民一般にまで日常に用いられていたとは考えられない。

以上は日本の問題として検討してきたが，さらに古代日本と最も関係の深かった中国古代に於ける蜂蜜の歴史を述べるのが順序であろう。しかし中国に関する資料は膨大なものなので，報告は次の機会に譲ることとする。したがって中国をのぞく古代オリエントの蜂蜜の起源について述べることにする。

エ　ジ　プ　ト

有史以前のものとされているスペインのアラニアに現存する岸壁画は，今から1万年から1万5千年前の旧石器時代の蜂蜜採取風景を描いたもので，人類が野性の蜜蜂の巣から蜂蜜を採取していた証拠として有名である。この種の洞窟壁画はアフリカに多くあるとされているが，それ以後の蜂蜜採取に関する情報は途切れてギリシア神話の中に改めて多く語られ，これらの物語はごく一般的なものとなって，西欧からの書物に数多く見ることができる。だが，確かな文書として蜂蜜のことについて記録されているのはエジプトである。

養蜂の発祥地は古代のエジプトであると考えられている。古代オリエントでは，甘味料として最も珍重されていたのは蜂蜜で，砂漠の奥まで出かけていって入手していたということである。これらの蜜は西アジアで野蜜と呼ばれているのと同じだったと筆者等は考えている。だが労力の割には少ししか採れず，高価なもので金持ちだけのものにすぎなかった。

蜂蜜に関する最古の記録として考えられるのは，カルトゥーシュと呼ばれる長円形の枠の外側に書かれた菅（すげ）と蜜蜂である。菅は上エジプトの象徴であり・蜜蜂は下エジプトを代表するものであり，あわせて上・下エジプト王を意味している。これは明らかに蜂蜜が貴重なものであったことを物語っていると考える。この文字を印した王名が見られるのは，初期王朝時代第一王朝のデン王（Ｄｎ；撃つ王）紀元前2920～2770年頃で，このシンボルは紀元前205～180年頃のプトレマイオス五世に至る実に約3000年間も利用され続けたのである[1]（Fig.1）。

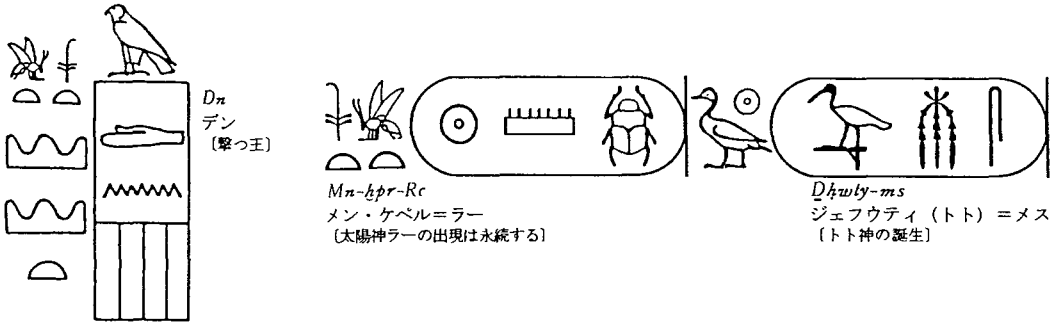

Fig.1　菅（すげsedge）と蜜蜂

古代のエジプトでは養蜂業はすでに重要な産業の一つとして発達しており，古記録にもしばしば記されている[2~①]。彼等が養蜂をしていたことの証拠として，第五王朝のネ・ウセル・ラ王（B.C.2416～2395）が建立したとされる太陽寺院から出土した蜂蜜採取のレリーフがある（Fig.2）。そこには「煙を吹きかける。蜂蜜を満たす。圧搾する。封印する。」とある。一番左にいる人物は巣箱の前にひざまずいて蜂蜜を取り出している。その隣の三人は甕の中に蜂蜜を注ぎ込んでいる。その次は破損していて不明だが，ヒエログリフから圧搾のシーンであると推定される。最後の場面は一人の男がひざまずいて，独特の形をした甕の蜂蜜を封印していて，彼の頭上には封印された甕が2個並べられている。（Ransom.H.M.の説明による。）その他にも粘土のパイプを山積みした蜂の巣の壁画があって，今もエジプトの田舎に残る伝統的な養蜂を彷彿とさせられる。また王の墓には数々の宝石とともに，蜂の巣や蜂蜜も埋葬されたと考えられる痕跡が見られるという[3)]。

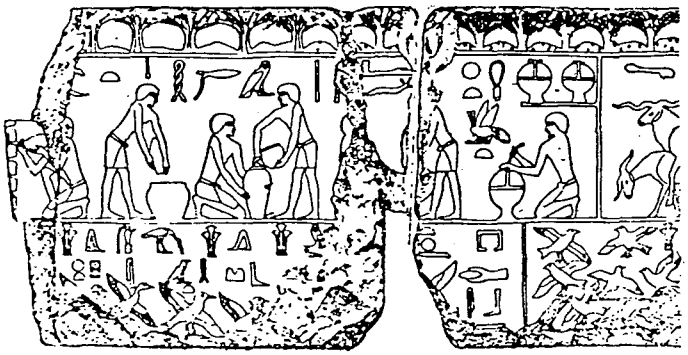

Fig.2　古代エジプトの採蜜作業

蜂蜜に関する記録は，第十八王朝（B.C.1550～1305）になると，埋葬品や貢ぎ物のリストの中に現れてくる。トゥトアンクアメン王（B.C.1334～1325）の墳墓から出土した小さい二つの土器の壷には「良質の蜂蜜」と書かれていた。また，大きなアラバスター製の壷に一見樹脂のような黒い塊があり，その塊には小粒の薄褐色をした結晶体が無数に混じっていたが，これは蜂蜜か果汁のいずれかであったろうと考えられている。蜂蜜のほかに，葡萄汁，ヤシ汁などの果汁が甘味料として，また甘味飲料として用いられたのである[2~②)]。

このように紀元前3000年頃には，王名に下エジプトを象徴する蜜蜂が用いられていて，以後のエジプトでも蜂蜜は神への大切な捧げ物であり，外国からの貢ぎ物ででもあった。例えばシリア産のモリンガ樹の油，松柏類の樹脂，蜜蠟やワインとともに蜂蜜は重要な貢ぎ物であった。腐ると跡形

も残らない物質が中心であるが，それでもエジプトに輸送する際に使った入れ物がのこっていると言う。その形態からしてエジプトにありふれた容器とは異なる土器に詰められて，半液体や液体状で運ばれてきたのである[4)]。

繁栄の絶頂期を迎え，外国から多くの貢ぎ物が送られ平和に過ごしたトトメス三世の時代を境にして，それ以後百年あまりの間に遠征の失敗や内乱により国内は次第に衰退してゆくが，ラメセス三世新王朝時代第二十王朝（B.C.1194～1163）の頃には内政は乱れ，王家の谷の労働者たちが給料の遅延を理由にストライキを起こしたという有名な事件が記録されているが，この王が課した義務である捧げ物の中に香料，油，とともに蜂蜜の量が1,529jarsと記されている。また神に捧げるために用意されたと考えられる種々の品目の中にやはり，香料，油とともに蜂蜜が331,702jarsと記録されている。このjarsの大きさや形体は明らかではないが，捧げ物として貴重であったことがうかがえる[5)]。

この王より二代前のラメセス二世の晩年の頃（B.C.1230年頃）モーセがイスラエル人を率いて，「蜜の流れるカナンの地」をめざしてエジプトを脱出したといわれている。そこで筆者等も「蜜の流れるカナンの地」へと蜂蜜を追うことにする。

カナンの地イスラエル

『旧訳聖書』にはエジプトは，カナンの地と同じく「乳と蜜の流れる地」と描写されていて，蜂蜜は乳と並んでよきものの象徴となっている。しかし，その地で虐げられていたイスラエルの民にとっては日常生活の甘味料としてぜいたくなものであった。モーセがエジプトを脱出したのは紀元前1250年頃とされている。民数記16章の12～14には「モーセは人をやって，エリアブの子デアルダタンとアビラムを呼び寄せようとしたが，彼らは言った。「我々は行かない。あなたは我々を乳と蜜の流れる土地から導き上って，この荒れ野で死なせるだけでは不足なのか。我々の上に君臨したいのか。あなたは我々を乳と蜜の流れる土地に導き入れもせず，畑もぶどう畑も我々の嗣業（代々受け継いできた仕事）としてくれない。あなたはこの人々の目をえぐり出すつもりなのか。我々は行かない」とその間のいきさつを詳しく述べている。このようにしてモーセがイスラエルの人々を引き連れてエジプトを脱出した頃には，すでにエジプトは，イスラエル人のあこがれの土地カナンと同じく「乳と蜜の流れる地」と描写されており，蜂蜜は乳とならんでよきものの象徴であった。しかしエジプトの地で苦難にあえぐイスラエルの人々にとっては乳と蜂蜜はあこがれの品々であったと考えられる。したがってカナンの地を求めてエジプトを脱出し，空腹で荒野をさまよった時に神から与えられて味わったマナ（何であるかは現代も不明）は，「蜜の入ったウエファースのようなもの」と感激したのであろう。

改めて旧訳聖書を開いて見ると，蜜，野蜜，蜂蜜と三通りの言葉が見られる。

このように野蜜と蜂蜜については表現通りそのままの理解ができるが，単に蜜と表現されているものにはナツメヤシからの樹液であるとか，ナツメヤシの実から得た糖蜜であるとか，或いは葡萄

の果実を煮詰めたものであろうなどと推定されている。しかしサムエル記14章26…には「兵士が森に入ると蜜が滴っていたが，それに手につけ口に運ぼうとする者は一人もいなかった」27…「だがヨナタンは手にもった杖の先端を伸ばして蜂の巣の蜜に浸しそれを手につけて口にいれた。すると彼の目は輝いた」…とある。また詩編19章10～11には「主への畏れは清く，いつまでも続き主の裁きはまことで，ことごとく正しい。金にまさり多くの純金にまさって望ましく，蜜よりも蜂の巣の滴りよりも甘い」とある。また，詩編81章17には「主は民を最良の小麦で養って下さる。わたしは岩から蜜をしたたらせあなたを飽かせるであう」と書かれているのである。事実，当時のパレスチナには野性の蜜が多くあったと推定され，旧訳聖書では多くの場合，野蜜を指していると考える。蜂の巣は岩間（詩編81:16）や森の中（サムエル記14:26）にあり，ユダヤの荒野（マタイ３：４）（マルコ伝１:16）に多くあったが，後には養蜂も行われるようになったのであろう[6]。

青年海外協力隊員としてネパールで養蜂の指導に当たっている中村純の「ネパールの養蜂」と題する論文中にスケッチとともに…はちみつ狩り…の記述がある。ネパールでは一本の木に20～30くらいあることも珍しくないというオオミツバチの巣の下で，夜間に火を焚いて蜂を煙でいぶしながら長い棒で貯蜜巣を突き，この棒に蜂蜜を伝わらせて容器に受けるという。ナタネの咲く12月から２月がシーズンで，一つの巣当たりバケツ一杯（約８リットル）も採れると言うことである[7]。この事実は，旧訳聖書中に表現されている流れる蜜の実感が得られる重要な資料である。

紀元前401年，ペルシアの小キュロス王子は兄のアルタクセルクセス王の王位を奪還しようと，統治領の小アジア沿岸地方のリュディアから，傭兵を引き連れてはるばるバビロンを目ざして，半年をかけてその近くの地点までまで来たのであるが，その地で乱戦の末戦死してしまう。敵中にとり残されたギリシア人傭兵一万数千人の6000キロにおよぶ脱出行がはじまる。従軍したクセノボンと言う兵士がリーダーとなり，食料の不足や，仲間割れ，雪深いアルメニア山中の難行軍，など数多くの苦難を乗り越えて，ギリシアの傭兵達は故国を目ざしついに帰りつくという記録を，クセノボンが書き残した『アナバシス』と名づけた長編がある。この中でアルメニアをやっとのことで脱出した一行が，黒海に面する町トラプゾンの少し手前のコルキス人やマクロネス人の住む辺りで宿営した際，「そこには蜂蜜の巣が多数あり，蜜を食べた兵士達が皆錯乱状態に陥り，吐き気や下痢を起こし，真っ直ぐに立っていることができなかった。少量しか食べなかった者はしたたか酒によったもののごとく，多量に食べた者は狂人の如くなり，瀕死の状態に陥る者すらあった。こうして多数の者が倒れてしまい，まるで戦いに負けた時のような体たらくで，士気の消沈ははなはだしかった。ところが翌日になって死人は一人も出ず，前日とほぼ同じ時刻に正気に還り，３日目，４日目には，ちょうど麻薬でも飲んだ後のような気分で，起き上がることができた」と記録している[8]。誠に不思議な興味ある話である。毒草から集めた蜜だったのだろうか，その理由は何も書かれていない。蜂蜜の成分はほとんどが高濃度の果糖とブドウ糖で殺菌性があり，赤痢菌では10時間，チフス菌と大腸菌は48時間で蜂蜜の中では死滅するとの記録もある[9]が，最近，蜂蜜を与えられた乳幼児が死亡した原因が，蜂蜜の中のボツリヌス菌であったと報じられ，幼い子供だけでなく，食品として一般に用いる時の注意が出たことがある。

メソポタミアを中心に

エジプトを逃れて「蜜と乳の流れる地」を求めて長の旅に出たイスラエルの人々は，ついにパレスチナにたどり着き，そこを遊牧の地とし，さらにシリアへと広がっていった。オリエント世界の中心はエジプトとメソポタミアであり，シリア，パレスチナはこの二大文明地帯を結ぶ陸橋であった。これらセム系の遊牧民は原住の人たちと混ざり合ってあちこちに小王国を作り，やがてバビロン王朝の歴史が始まった。以後約300年間がハンムラビ朝として栄え，古典文明を築き上げた。

ハンムラビとその後継者達の時代（B.C.2000～1000）に国境を越えて外に運ばれて行った品々は，大麦，ゴマ油，皮革，羊毛，布地や衣服であり，輸入には原材料と奢侈品であったとの記録がある。一例として，アッシリアのシャムシーアダド一世（B.C.1815～1759）は彼の碑文の一つに，諸国からかき集められた品々を列挙している。黄金と銀，ラピスラズリと紅玉髄，杉やに，上質の油と共に蜜が加えられているのである[1-①]。

一方，中期ミノア時代（B.C.1500頃）のクレタには東地中海文化の中心都市としての面目躍如たるものとして，広壮な諸宮殿が造営され始めた。こういった宮殿の王の大経済が陸上の遠方地域（バビロン等）への交易を支えたとされている。宮廷経済に所属する工房では特に銅と羊毛の加工が盛んであったが，広大な倉庫には銅の述べ棒，相当多量の油，穀物，いちじく，ワイン，蜜，香辛料，装身具，羊毛，織物および工具が山と積み上げられていた。これらの取引はシリアを経てオリエントの広範囲で行われ，蜂蜜もまた取引されていたと推定されるのである[1-②]。なお，紀元前７世紀の末に新アッシリア帝国が崩壊すると，バビロンのカルディア王朝の諸王が，アッシリア人の後を承けて，シリアやフェニキアに対する自分たちの支配権を認めさせようとした。バビロンの王ナポニドウス（B.C.553～539）の時代に書かれた二つの書が現存する。紀元前551年から翌年にかけての記録で，輸入品とその価格が記してある。その輸入品リストの中に，地中海からの銅，レバノン産の鉄，産地名なしの錫，メソポタミアやエジプトからの染料と並んで，ワインと蜜は以前から引き続きシリア産のものとして記録されている[1-③]。

メソポタミアの薬について書かれた粘土板には，ナツメヤシのシロップとともに蜂蜜が矯味薬として用いられていることが記されている。内服薬として飲みやすくしようと工夫されたのであろう。

またReallexikon der Assyriologie und Vorderasiatischen ArchaologieにはHonigの項に……古代のメソポタミアの儀式に於いて，蜂蜜はいろいろな違った目的で用いられた。…として以下のような説明がなされている。(1)当時の数ある儀式に蜂蜜は神の像のまえに捧げる食事の一つとして用いられた。これは疑いもなく古代の人々が大切な食品として用いられていたと理解できる。事実グデアの円筒碑文A.B.の中で蜂蜜は供物として出てきている。(2)アッシリアや新バビロニアの王たちは，オイル，バターや同様の物質とともに，蜂蜜は，地方の建物を建設する場合に，建物に直接そそいだり，モルタルに混ぜたり，ときには干レンガにかけたりした。これは恐らく建物の強度を増すために用いられたのであろう。(3)また神官は御神酒として蜂蜜をもちいたらしく，その詳細については不明であるが，ウルの第三王朝のころにはすでに儀式に利用されていた。この神官が用

いた御神酒は実は原始時代の酒即ち蜂蜜酒と推定されると解説している[2)]。

蜂蜜酒はヘシュキオスによると，時代はずっと新しく紀元前6世紀頃の例になるが，はっきりとスキタイ人の飲み物と記されているし，またヘロドトスの描写によると，「ドナウ川の北には蜜蜂で充満している地方があって，人がそこへ進むことが出来ないほどであった」さらに言語学者オート・シュラーダ等は印欧語族の酒が蜂蜜酒に始まるとし，それがもっとも忠実に伝えられてきたのはリトアニアとスラブ民族であると述べている。そしてそれ以外の印欧語族は，彼らが拡大する際に他の酒に出会ったので，これが蜜酒の習慣を制限したりやめさせてしまったのだと説明している[3)]。

しかし人間の食習慣はたやすく変わってしまうとは考えられないし，蜂蜜酒は単に水で薄めて放置して約40日くらいで，温度さえ適当であれば発酵してアルコール飲料となるので，恐らくワインよりももっと古くからあったのではないか。言語学的な考察からの詳しい蜂蜜酒の歴史的，地域的な議論は風間喜代三の『ことばの生活誌』—インド・ヨーロッパ文化の原像—に譲ることにして[4)]，Henri Limetの『シュメール人たちの料理』についての論文から[5)]，蜂蜜に関係ある箇所を採りあげる。ウル第三王朝のシュメール人はメソポタミアで収穫した穀物，主として大麦で（ホプスまたはナンのように）平らで丸く味のついていないパンを作って食べていた。小麦も収穫されていたが，その量は少なく製粉に手間がかかった。だが良質のパンは小麦粉を用い菜種油やラード，羊のバターが加えられ，時には蜂蜜も加えられた。Gugcakesは高品質の粉とGheeまたは透明なバターで作られたが，これは一般の人たちが食べるのではなく高貴な人々のテーブル用とされた。またしばしば神に捧げるための，時には王から授かる「Gill.Lam」と称するものは，少量の粉に甘みづけとして蜂蜜を加えて練った物のようであり，デイツ（干しなつめ）やいちじくが加えられた。またある種のスープには，羊の油や蜂蜜，肉汁が入れられていた。蜂蜜は金持ちだけが用いていて，商人の記録のなかには蜂蜜は輸入されていたとある。しかしMountain honey（野蜜）だけはずっと遠くからもたらされた。こげ茶色，赤，そして白い蜂蜜は本物であり，Date—honeyは蜂蜜ではなくてナツメヤシの実から作ったシロップである。また蜂蜜はオイル類のリストに分類されていた。ちなみにアッカド語で，蜂蜜はlal，焦げ茶色の蜂蜜はlal gi，野蜜はlal kur，赤い蜂蜜はlal su，白い蜂蜜はlal babbarと呼び，Date honeyは（a syrup）lal zu lum maと呼んだ。紀元前2000年紀後半のメソポタミアは，全地域を支配するような大帝国は興らず，南ではカッシート王朝とそれに続いてイシン第二王朝が，北部には中期アッシリアとミタンニが興亡と盛衰をくり返していたが，中でも西のヒッタイト（現在のトルコの北中央部）がカフカズをこえてアナトリアに進出し，周囲に影響力を及ぼしていた。こうした中でオリエントに於ける国際交流が盛んになった時代でもあった。

ヒッタイトでもメソポタミアと同じく蜂蜜に関する情報が，残された楔型文字から得られた。蜂蜜はmilit—;であり，甘いと形容詞に用いることもある。蜂蜜の用途として儀式用に用いる材料のひとつとしてリスト・アップされている。また捧げ物としての料理の材料の一つであった。例えばビールやワインと共に蜂蜜を混ぜ合わせて御神酒とした。また，ワイン，オリーブ・オイル，蜂蜜

を壷（h－vessel）に満たし，さらにイチジク，干し葡萄，筋肉，塩そして羊の脂肪を加える。このミックスされた液体を年齢を重ねた婦人が暖炉に注ぐとある。さらにその上に小さくしたパンを撒き，さらにその上に蜂蜜と純粋なオイルを注ぐ。あるいは捧げ物として調理された食品の上に，細かくしたチーズや蜂蜜をかけたり，香りを出すために燃やしたりした。また，神からの霊魂を呼び戻すための道を印づけるために，オート・ミールや蜂蜜，植物の油や動物の油脂などを注ぎ，神の進まれた跡には純粋な油や蜂蜜を塗りつけた。以上はいずれも儀式の際のマナーの様式である。ヒッタイトの人たちの母神は蜜蜂のお腹に住むと考えていたらしく，失われた神を求めて，蜜蜂のお腹にある蜂蜜を消費するとの記述があるが，これら蜂蜜に関する民間伝承については，筆者等のこれからの研究課題にしたい。

ヒッタイト法典の91条，92条には蜜蜂やその巣を盗んだ時に関する規則が述べられているが，蜂蜜は予想以上に古くから広い地域で，単に食品としてだけではなく，宗教的にも重要な役割を担っていたことがわかり，改めて蜂蜜と人々の生活とのかかわりの深さを知ることができる[7]。

古代の神々は単に供物の受納者としての資格で記されているが，クノッソスの，或る一枚の粘土版に，ポセイドンは雄牛１頭，雄羊４頭，多量の小麦，葡萄酒，蜂蜜，チーズ15個，軟膏，羊の毛皮２枚を受納したとある。そして蜂蜜の量的な推察可能な記録として，ミュケナイ粘土版記録文書no.205には，「すべての神々に，アンフオーラ一杯の蜂蜜」あるいは「迷宮（？）の夫人には，アンフオーラ一杯の蜂蜜」とあり，古代ギリシアでも蜂蜜は神への供物であり，重要な甘味料であったことがうかがえる[8]。ギリシア神話に始まるヨーロッパでの蜂蜜に関する話題は，すでに多く語られているのでここでは省く。東ヨーロッパからインドや東南アジアまで活躍し，中国に西からの文化をもたらしたソグド人（サマルカンドを中心として，ザラフシャン川流域に住んでいた）は子供が生まれると，口の中に石蜜（蜜蜂が岩間に蓄えた蜜）を入れ，手のひらに膠をおいて，その子が成長した時，「口には常に甘言をあやつり，また銭を持てば膠が粘りつくように」と願ったという有名な話がある。このソグド人の活躍した西アジアから中国に到る地域の蜂蜜にまつわる調査結果は次の機会に報告する。

終　わ　り　に

以上，蜂蜜の歴史と利用を「人々と自然の調和」に視点を置き，文献を中心に述べた。その要点はつぎのように要約される。

(1) 砂糖と蜂蜜の違いは，成分の違いだけでなく，人の労力との係わりに違いが認められる。蜂蜜はいささかの民族的な苦痛を与えたことはあったにせよ，歴史的には平和でしかも自然との調和を保ちつつ綿々と引き継がれ，大切に愛用されてきたといえる。

(2) アンケートの結果，蜂蜜の歴史については曖昧である。また，現代の日本の食生活に蜂蜜は重要な位置にはないが，製菓用や薬用としての認識がある。

(3) 古代から人々は「甘いもの」に対する要求が強く，蜂蜜は古くから人々の暮らしに貢献し，

愛され続けてきたといえる。

(4) 蜂蜜の主な利用は，甘味としての食用，薬用，神への捧げ物等であり，交易品としての重要な役割も果たし，また建築用としても使われていた。

謝　　辞

本研究を進めるにあたり，資料の提供ならびにご懇篤なご助言，ご指導を賜りました京都産業大学の大城光正教授，ＮＨＫ学園の小林登志子先生に心より御礼申し上げます。

文献　1（日本における…）

1）柴田　承二著　正倉院の薬物調査　フアルマシア　Vol.34No.2　(1998)　P.156～161
2）宇治谷　孟著　続日本紀（中）全現代語訳　講談社学術文庫　(1996)　P.248
3）宇治谷　孟著　　続日本紀（上）全現代語訳　講談社学術文庫　(1996)　P.390～391
4）日本古典文学大系　日本書紀下　岩波書店　(1987)　①　P.253
②　P.132
※参考　自然界の幾何学者みつばち　立風書房（1994）P.132
5）遠山　美津男著　白村江　古代東アジア大戦の謎　講談社現代新書　(1997)　P.72～74
6）自然の手帳シリーズ　みつばち自然界の幾何学者　立風書房　(1994)　P.131～132①. ②
7）小山　修三著　縄文文学への道　ＮＨＫＢｏｏｋｓ　日本放送出版協会　1996　P.194

文献　2（エジプト）

1）松本弥著　図説　古代エジプト誌　ヒエログリフをひらく　弥呂久　1995
2）三笠宮崇仁著生活の世界歴史１『古代オリエントの生活』　河合書房新社（1988）
①, ②　P.296
3）渡辺孝著蜜蜂の文化史筑摩書房（1944）　P.16～18
4）ホルスト・クレンゲル著　江上　波夫，五味　亨訳　古代オリエント商人の世界
山川出版社　(1988)　P.80
5）ADOLFERMAN著　Life in Ancient Egypt. Dover Publication INC.（1971）P.300～301
6）旧訳聖書
7）原淳著　はちみつの話　六興出版　(1988)　P.111～112
8）クセノボン著　松平　千秋訳　アナバシス　岩波文庫　岩波書店　(1993) P.198
9）清水　美智子著　健康を食べよう　ハチミツの本　文化出版局　P.31

文献　3（メソポタミアを中心に）

1）ホルスト・クレンゲル著　江上波夫，五味亨訳　古代オリエント商人の世界　山川出版社
（1988）①　P.117～118，②P.171～172，③P.297～298

2）Reallexikon der Assyriologie und Verderasiatischen Archaologie. Walter de Gruyter•Berlin•NewYork（1987）P.469

3）オトー・シュラーダー著　ハンス・クラーエ改訂　　風間喜代三訳
インド・ヨーロッパ語族　クロノス出版　P.60

4）風間喜代三著　ことばの生活誌　インド・ヨーロッパ文化の原像へ　平凡社　P.178～182

5）Henri Limet 著 The Cuisine of Ancient Sumer Biblical Archeologist.（1987）P.132～147

6）The Hittite Dictionary.（1986）Chicago P.250

7）HARRY A.HOFFNER. JR. 著 Food Production in Asia Minor AMERICAN ORIENTAL SOCIETY 1974 P.76

8）ジョン・チャドウイック著　大城功訳　線文字Bの解読　みすず書房　P.181～217